



令和3年11月1日

東京都千代田区四番町5番地3  
科学技術振興機構（JST）  
Tel：03-5214-8404（広報課）  
URL <https://www.jst.go.jp>

## 戦略的創造研究推進事業（社会技術研究開発）における 2021年度新規プロジェクトの決定について

JST（理事長 濱口 道成）は、社会技術研究開発センター（RISTEX）が推進する戦略的創造研究推進事業（社会技術研究開発）において、2021年度の新規プロジェクトを決定しました（別紙1）。

社会技術研究開発は、現存する社会問題の解決や将来起こり得る社会問題への対処などを通して、新たな社会的・公共的価値の創出を目指す事業です。社会問題に関係するさまざまな関与者と研究者が協働するためのネットワークを構築し、競争的環境下で自然科学と人文・社会科学の知識を活用した研究開発を推進します。

今回は、2021年度に創設した「SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム（社会的孤立・孤独の予防と多様な社会的ネットワークの構築）」について提案を募集した結果、大学や国立研究開発法人など多様な提案者から応募がありました。

募集締め切り後、プログラム総括およびプログラムアドバイザーが書類選考と面接選考による事前評価を実施し、採択課題を決定しました。

プログラムの応募数と採択数は以下の通りです。

「SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム（社会的孤立・孤独の予防と多様な社会的ネットワークの構築）」

（プログラム総括 浦 光博 追手門学院大学 教授）

募集期間：2021年5月20日（木）～7月20日（火）正午

応募数：78件

採択数：研究開発プロジェクト 7件

事業やプログラムの詳細は下記ウェブページをご参照ください。

ホームページURL：<https://www.jst.go.jp/ristex/>

### <添付資料>

別紙1：「SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム（社会的孤立・孤独の予防と多様な社会的ネットワークの構築）」2021年度新規採択プロジェクト一覧

別紙2：「SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム（社会的孤立・孤独の予防と多様な社会的ネットワークの構築）」2021年度応募数および採択数

別紙3：「SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム（社会的孤立・孤独の予防と多様な社会的ネットワークの構築）」評価者一覧

別紙4：「SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム（社会的孤立・孤独の予防と多様な社会的ネットワークの構築）」2021年度提案募集概要

参考：戦略的創造研究推進事業（社会技術研究開発）の実施状況（2021年度）

<お問い合わせ先>

科学技術振興機構 社会技術研究開発センター 企画運営室

〒102-8666 東京都千代田区四番町5番地3

東出 学信（ヒガシデ タカノブ）

Tel : 03-5214-0133 Fax : 03-5214-0140

E-mail : boshu-koritsu[at]jst. go. jp

**「SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム（社会的孤立・孤独の予防と多様な社会的ネットワークの構築）」  
2021年度新規採択プロジェクト一覧**

**新規採択プロジェクト①**

**孤独・孤立のない社会の実現に向けたSNS相談の活用**

研究代表者：上田 路子（早稲田大学 政治経済学術院 准教授）

概要	研究開発への参画・協力機関
<p>新型コロナウイルス感染症の影響で対面コミュニケーションが制限されている現在、孤独・孤立およびそれに付随する悩みを抱える人たちにとってSNS相談などの非対面式相談機関の重要度は急上昇している。しかし、感染の拡大とともに急増した相談件数に対応能力が追いついておらず、有効性の検証も不十分である。さらに、困難を抱えていても相談機関に援助要請をしない人が大多数であり、彼らに積極的・効果的なアプローチをしてSNS相談などにつなげる方策を探る必要がある。</p> <p>本プロジェクトは、孤独・孤立の実態とメカニズムを理解し、効果的な対策につなげるために、SNS相談に寄せられた相談内容の分析を通じてハイリスクグループの実態把握を実施する。また、一般市民対象の数年間にわたる追跡調査と関係流動性の概念に注目した国際比較調査を行う。しかし、孤独感にはスティグマ（差別や偏見、汚名など）が伴うため、調査対象者が正直に自分の孤独感を申告してくれるとは限らない。そこで、IAT（潜在連合テスト）を用いて調査対象者の潜在的孤独感を測定し、効果的な介入につなげる。孤独死の実態も明らかにし、地域的介入ができるようにする。さらに、1人でも多く相談機関につなげるための方法を実践的に探り、援助要請行動を引き出す効果的な方法を明らかにする。最終的にはSNS相談に寄せられた大規模な匿名テキストを分析することを通じて、効果検証を行い、SNS相談体制の運営の改善に向けた開発・実装を行う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 早稲田大学</li> <li>・ 一橋大学</li> <li>・ 和光大学</li> <li>・ 理化学研究所</li> <li>・ あなたのいばしょ</li> <li>・ OVA</li> <li>・ 日本少額短期保険協会</li> <li>・ 宛名のないメール など</li> </ul>

## 新規採択プロジェクト②

### 地域とつくる「どこでもドア」型ハイブリッド・ケアネットワーク

研究代表者：近藤 尚己（京都大学 大学院医学研究科 教授）

概要	研究開発への参画・協力機関
<p>長引くコロナ禍が子どもや若者、女性へ及ぼす影響のメカニズムは十分明らかにならず、支援ニーズの増加と支援者間の情報共有や連携の困難により相談支援の現場負担が高まっている。支援対象者の特徴の把握や支援プラン策定は、支援者の経験とスキルに大部分が委ねられており、経験の浅い支援者などへの支援と地域ぐるみの支え合いを可能にする環境整備が急務となっている。</p> <p>本プロジェクトでは、①3万人の縦断インターネット調査データを活用して、コロナ禍が子どもや若者、女性に及ぼす社会的孤立・孤独や健康・生活への影響を分析する。②分析で得た知見を踏まえ、これまでに開発してきた支援者の支援データシステムの「子ども・若者・女性版」をつくる。③別途開発してきた「住民主体の共生型地域づくり普及支援ガイド」および「地域住民を含む顔が見える社会資源マップ」などのツールをアップデートして、同システムに接続する。このシステムには対象者のタイプ（ペルソナ像）情報や支援記録の分析に基づく優れた支援者のナレッジを盛り込む。支援対象者のタイプとタイプ別の効果的な支援プランを提示し、これを現場とオンラインの両面（ハイブリッド）のネットワーク上で運用する。地域の人々の誰もが支援の入口（ドア）となり、どこから入ってもケアの輪に包摂され、互いに支え・学び合い、豊かなケアが継続する「どこでもドア型」のケアネットワークを構築する。</p>	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 京都大学</li><li>・ 慶應義塾大学</li><li>・ 東京工業大学</li><li>・ 大阪医科薬科大学</li><li>・ 畿央大学</li><li>・ 大和大学</li><li>・ 大阪行岡医療大学</li><li>・ 日本ファンドレイジング協会</li><li>・ 草の根ささえあいプロジェクト</li><li>・ 起業支援ネット</li><li>・ KYOTO SCOPE</li><li>・ 名古屋市子ども・若者総合相談センター</li><li>・ 北日本コンピューターサービス株式会社など</li></ul>

新規採択プロジェクト③

社会的孤立の生成プロセス解明と介入法開発：健康な「個立」を目指して

研究代表者：太刀川 弘和（筑波大学 医学医療系 教授）

概要	研究開発への参画・協力機関
<p>従来の社会的孤立・孤独研究および実践では、社会的孤立の概念があいまいであり、その生成プロセスの把握ができていない。加えて、社会的孤立解消に向けた取り組みは、個別支援にとどまり、予防的介入も行われていない。さらに新型コロナウイルス感染症の流行と感染対策により、ソーシャルサポートやコミュニケーションの減少など「社会全体の孤立」が生じ、これが自殺危機などメンタルヘルスに大きな影響を与えた。</p> <p>本プロジェクトでは、社会的孤立・孤独の生成プロセスを明確化し、孤立のスティグマを軽減して重症化を防ぐ適正な介入手法をコミュニティベースで開発することにより、個人が健やかに自立生活を継続できる「個立」の生成を目指す。具体的には、一般成人が抱く社会的孤立者へのイメージ等の社会調査や、社会的孤立の当事者、支援者を対象とした調査に基づき、社会的孤立の生成プロセスを明確化する。また、社会的孤立を助長すると考えられるスティグマの潜在・顕在的測定指標や、コロナ禍でもスマートフォンなどで実施できるアプリケーションを開発し、大規模なオンライン実験による社会的孤立者の認知的特徴を解明する。さらに個人が健やかに自立生活を継続できることを目指した予防介入法の開発とコミュニティベースの効果検証を行う。孤立前の段階にある中学生、「80」代の親が「50」代の引きこもる子どもの生活を支える80-50問題に直面する前の中高年を対象に、社会資源の利用やセルフケアなど孤立をメンタルヘルスの危機に至らせない生活方法を学び、コロナ禍でも実施可能なオンライン予防教育、研修プログラムを作成し、研修を実施して、開発した指標によりその効果を検証する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・筑波大学</li> <li>・東洋学園大学</li> <li>・東北大学</li> <li>・弘前大学</li> <li>・東京家政大学</li> <li>・茨城県笠間市</li> <li>・茨城県立こころの医療センター</li> <li>・Humber College</li> <li>・Ben-Gurion University of the Negev</li> <li>・Karolinska Institutet など</li> </ul>

## 新規採択プロジェクト④

### 職場における孤独・孤立化過程の分析—総合的予防プログラムの開発に向けて—

研究代表者：松井 豊（筑波大学 働く人への心理支援開発研究センター 主幹研究員）

概要	研究開発への参画・協力機関
<p>職場内の対人関係の問題やコロナ禍のテレワークなどにより、職場内で孤立している従業員が早期退職に至ったり、メンタルヘルス問題に苦しんだりする状況が生じている。高齢者の社会的孤立や中高年の引きこもりのように、社会から完全に孤立化する状況に陥る前に、職場内で孤独・孤立化の兆候を捉え、適切なケアを行い予防する必要がある。</p> <p>本プロジェクトでは、孤独・孤立が早期退職やメンタルヘルスの問題に直接結びつくのではなく、「自分が役に立っていない（役割感）」「居心地が悪い（安心感）」といった要素が加わって問題となると理解し、これらの時間的な変化を把握することが、職場内の孤独・孤立の予防に重要であると考えます。そこで、職場内孤立の状態を把握するために、①孤独・孤立の主観的指標、②「入社から現在までの孤独感や孤立感を感じた経験」をテーマとする予防チャート、③F I L—q I A T（孤独・孤立を表す文章を刺激とする潜在連合テスト）、④孤独検出ストループ課題（色を付けたさまざまな単語を呈示し、単語の名称ではなくその色を回答させる課題）の4つの指標を測定するツールを開発する。これらの指標を1ヶ月に1～2回の頻度でスマートフォンなどで測定し、孤独・孤立化過程を可視化し、その兆候が見られたら、セルフケアや上司による支援や、専門家による支援などを実施するプログラムを開発する。</p>	<ul style="list-style-type: none"><li>・筑波大学</li><li>・明星大学</li><li>・東京成徳大学</li><li>・埼玉学園大学</li><li>・東京都立産業技術大学院大学</li><li>・ピープルアナリティクス&amp;HRテクノロジー協会</li><li>・三菱ケミカル株式会社総務人事本部キャリアサポート部</li><li>・j . u n i o n 株式会社 など</li></ul>

## 新規採択プロジェクト⑤

### 演劇的手法を用いた共感性あるコミュニティの醸成による孤立・孤独防止事業

研究代表者：虫明 元（東北大学 大学院医学系研究科 教授）

概要	研究開発への参画・協力機関
<p>日本は従来、諸外国に比べて孤独化の傾向が高いことで知られ、この孤独化による自尊心の低下が危惧されていた。さらに、コロナ禍において、コミュニティの絆が弱まって、孤立化・孤独化するリスクのある人々への共感性が失われていることが、人々の孤独感に強く影響していると示唆され、人々の社会的孤立の深刻化が懸念されている。</p> <p>本プロジェクトでは、応用演劇の手法を用いて、共感性のあるコミュニティの醸成を目指す。まずは他者理解に必要な社会情動的スキルを育む、応用演劇と科学的人間理解を組み合わせた教育プログラムを創出する。さらに参加者が互いに語り、傾聴し、演じるための安全基地となる豊かなコミュニティづくりを育む取り組みを実施し、そのファシリテーターを育成する。また、各種性格特性、生理的指標、人間形成の質的調査を組み合わせた多次元尺度による評価法を開発して、孤立・孤独のリスク評価を目指す。演劇的手法をコミュニティ醸成に役立てるために即興再現劇の演劇グループ、地元の仙台の演劇グループとの連携体制を構築し、まずは東北大学と宮城教育大学の学生を対象に、遠隔と対面を交えたハイブリッド形式でこのプログラムを実施する。さらに、育成した人材とともに、ニーズのあるコミュニティにおいて、演劇家と現場を結ぶファシリテーターとして関わり支援する。</p> <p>これらの実践を通じて、コミュニティの絆を育み、他者との健全な関わり場を生み出すことで、多様な人々とのコミュニケーション、人々をケアする共感性のあるコミュニティづくりに寄与し、孤立・孤独の防止を目指す。</p>	<ul style="list-style-type: none"><li>・東北大学</li><li>・宮城教育大学</li><li>・PLAY ART! せんだい</li><li>・劇団プレイバックーズ</li><li>・スクール・オブ・プレイバックシアター日本校</li><li>・アスカカンパニー株式会社</li><li>など</li></ul>

## 新規採択プロジェクト⑥

### 新生活に伴う孤独リスクの可視化と一次予防

研究代表者：柳澤 邦昭（神戸大学 大学院人文学研究科 講師）

概要	研究開発への参画・協力機関
<p>社会的孤立・孤独は心身の健康状態に悪影響を及ぼすことが知られている。しかし、これまで孤独リスクの検証はほとんど行われていない。新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響による孤独の流行は深刻で、その影響は18～24歳で顕著であると英国の研究は報告している。よって、こうした若年世代を対象とした予防対策が喫緊の課題である。大学・企業などでは、孤独リスクの高まる新生入生や新社会人に対してさまざまな予防対策が講じられているが、現状ではそれらの有効性を検証する手段に乏しい。</p> <p>本プロジェクトではこうした問題意識のもと、現状の孤独感や将来の孤独リスクを可視化し、科学的エビデンスに基づいた孤独対策の整備を目指す。まずはWeb調査・実験、fMRI実験、SNSデータ、ウェアラブル端末データなど多面的なデータにより、孤独感を規定する個人レベルの要因を明らかにする。さらに、大学生、社会人を対象とした大規模Web調査により、大学や企業の特徴や、コロナ禍における業態変化など、集団レベルの要因を特定する。これらの結果をもとに、機械学習によって個人の孤独リスクを予測する検出器を開発する。加えて、各大学や企業に所属することで生じる孤独リスクを数値化するとともに、孤独の予防として有効な施策を明らかにする。検出器の開発後は、民間の健康管理センターなどで有効性を検証し、さらなる改良を行う。また、効果的であると特定した予防施策を、各大学・企業において実践する。</p>	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 神戸大学</li><li>・ 京都大学</li><li>・ 広島大学</li><li>・ 中部大学</li><li>・ 近畿大学</li><li>・ 追手門学院大学</li><li>・ 大阪総合保育大学</li><li>・ 金沢工業大学</li><li>・ 西九州大学</li><li>・ 広島文教大学</li><li>・ 富山大学</li><li>・ 大阪大学</li><li>・ 岡山大学</li><li>・ La Trobe University</li><li>・ 京都芸術大学</li><li>など</li></ul>



## 新規採択プロジェクト⑦

### すべての子どもの社会的孤立・孤独・排除を予防する学校を中心としたシステムの開発

研究代表者：山野 則子（大阪府立大学 大学院人間社会システム科学研究科 教授）

概要	研究開発への参画・協力機関
<p>子どもの社会的孤立・孤独や社会的排除の問題として、①子どもが声をあげられず周囲が気づかない、②学校組織が教師の抱え込みを生む、③身近な支援が認識されず必要な子どもに届かない、といった問題がある。また、新型コロナウイルス感染症の流行により、保護者の就業状況の悪化、家族関係の悪化などを含め、ストレスを抱え、社会的孤立となる子どもの増加が見込まれる中、子どもの潜在化したリスクを早期に把握し、適切な支援につなぐシステム活用は喫緊の課題である。</p> <p>本プロジェクトのビジョンは、子どもに安心を提供できる、持続可能な社会システムの実現である。そのための達成目標は第1に、例えば子どもが貧困を恥ずかしいことと思わなくていい環境創生、第2に、教師が個人で対処に追われない体制の構築、第3に、学校として地域資源を知り活用できるようになること、である。実施内容は以下の3点である。Ⅰ) 学校においてAIスクリーニングの実用化を目指し、スクリーニングシステムによって自動的に上記のことができるようになる。Ⅱ) 教育行政・教師・スクールソーシャルワーカー・スーパーバイザー・地域資源メンバーによるネットワークを構築し関係者の評価キャパシティを形成することで持続可能性を高める。Ⅲ) バックアップするために体制構築（養成講座案の作成とモデル実施、個人情報保護ボトルネック対応マニュアルの完成）を行う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大阪府立大学</li> <li>・東北福祉大学</li> <li>・群馬医療福祉大学</li> <li>・日本福祉教育専門学校</li> <li>・日本大学</li> <li>・大阪市立大学</li> <li>・一般社団法人生命保険協会大阪府協会</li> <li>・日本ソーシャルワーク教育学校連盟</li> <li>・堺市社会福祉協議会</li> <li>・全国こども食堂支援センター・むすびえ</li> <li>・大阪府</li> <li>・大阪府能勢町</li> <li>・神戸市</li> <li>・沖縄県</li> <li>など</li> </ul>

## <プログラム総括総評>

浦 光博（追手門学院大学 教授）

本プログラムは、人・組織・コミュニティ間の多様な社会的つながり・ネットワークを実現し、社会的孤立・孤独を生まない社会の創出を目指し、「SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム」の下に特別枠（社会的孤立枠）として、2021年度に発足しました。さまざまな社会構造の変化を踏まえ、社会的孤立・孤独のメカニズムの解明、孤立・孤独のリスク評価手法（指標など）および社会的孤立・孤独の予防施策開発と、そのP・O・C（概念実証）までを一体的に推進します。2021年度は全ての提案について、新型コロナウイルス感染症の社会的影響を踏まえたものを募集しました。

今年度は本プログラム発足後初めての公募となりましたが、当初から多くの関心が寄せられ、応募総数は計78件。書類選考、面接選考を経て、最終的に7件の研究開発プロジェクトを採択しました。今回の公募に応じた提案の分野は、人文・社会科学のほか、ライフサイエンスや情報通信、社会基盤など、融合的なものを含め多岐にわたっています。また、対象とする社会的孤立・孤独の問題の切り取り方やアプローチについても、ユニークな着想や視点が数多く見られました。

社会的孤立・孤独の予防という重要なテーマに真剣に取り組む意欲的な提案ばかりでしたが、評価に当たっては次のような観点を中心に議論を行いました。社会的孤立・孤独の個人的要因だけでなく社会的要因についても視野に入れているか、提案での取り組みから社会的孤立・孤独を生まない社会をどう作り出すのかの構想が含まれているか、本格研究開発に向けて、P・O・Cの実施、社会実装への道筋が明確かどうか、成果がどのようなインパクトをもたらすことができるか、といった観点です。

この度採択した7件の研究開発プロジェクトは、いずれも新たな社会像の描出、社会的孤立・孤独の予防にとって、重要な成果が期待できるものです。新型コロナウイルス感染症の感染拡大によってソーシャルサポートやコミュニケーションが減少し「社会全体の孤立」が生じる中、社会的孤立・孤独の生成プロセスを明確化し、健康な「個立」の生成を目指すものや、コロナ禍でストレスを抱え、社会的孤立状態に陥る子どもの増加が見込まれる中、子どもの潜在化したリスクを早期に把握し、適切な支援につなぐシステムの開発に取り組むものなど、どのプロジェクトも社会的インパクトへの期待の高いものとなっています。

本プログラムにおいては、研究側と施策現場側のかい離を埋めて研究と実践を同時進行し、施策現場から得られたさまざまな知見を、制度・社会デザインにつなげていく社会実装のための研究が必要です。社会的孤立・孤独を生まない社会の創出を目指して、来年度以降も、この点は重視したいと考えています。

今後、本プログラムでは、新しい社会像の実現に向けた構想の策定、研究側と施策現場との接続などの体制構築を促進するために、多様な立場から社会的孤立・孤独の予防に取り組む方々が出会い、研究開発プロジェクトの形成につなげる場を提供していきます。また、各研究開発プロジェクト間の連携や、各研究開発成果の横断的・俯瞰的なとりまとめを行い、社会への積極的な発信や、対話を進めていきたいと考えています。

**「SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム  
（社会的孤立・孤独の予防と多様な社会的ネットワークの構築）」  
2021年度応募数および採択数**

## ○ 応募数および採択数

応募	面接	採択	採択率（パーセント）
78	17	7	9パーセント

## ○ 女性が研究代表者となっている課題の数

応募	面接	採択
27	4	2

## ○ 研究代表者所属

	国立大	公立大	私立大	国研・ 独法	公益法人	民間企業	NPO	自治体	その他	合計
応募数	32	11	23	5	3	3	0	0	1	78
面接数	8	3	3	2	0	0	0	0	1	17
採択数	5	1	1	0	0	0	0	0	0	7

※「その他」は国立高等専門学校

## ○ 応募の地域別内訳（研究代表者所属）

北海道	東北	関東	中部	近畿	中国	四国	九州	計
3	3	34	9	16	5	2	6	78

「SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム  
 (社会的孤立・孤独の予防と多様な社会的ネットワークの構築)」  
 評価者一覧

	氏名	所属・役職
プログラム 総括	浦 光博	追手門学院大学 教授
プログラム アドバイザー	有末 賢	亜細亜大学 都市創造学部 教授
	石井 光太	作家
	稲葉 陽二	元 日本大学 法学部 教授
	岩田 正美	日本女子大学 名誉教授
	宇佐川 邦子	株式会社リクルート ジョブズリサーチセンター センター長
	岸 恵美子	東邦大学大学院 看護学研究科 研究科長／教授
	工藤 啓	認定特定非営利活動法人育て上げネット 理事長
	平田 オリザ	芸術文化観光専門職大学 学長
	藤森 克彦	日本福祉大学 福祉経営学部 教授 みずほリサーチ&テクノロジーズ株式会社 主席研究員
	藤原 佳典	東京都健康長寿医療センター研究所 社会参加と地域保健研究チーム チームリーダー

(五十音順、所属・役職は2021年10月現在)

**「SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム  
(社会的孤立・孤独の予防と多様な社会的ネットワークの構築)」  
2021年度提案募集概要**

### 1. 研究開発プログラムの目標

本プログラムでは、社会的孤立・孤独のメカニズムを明らかにするとともに、社会的孤立・孤独を生まない社会像を描出し、人や集団が社会的孤立・孤独に陥るリスクの可視化や評価手法（指標など）、予防する社会的仕組みの研究開発を推進します。本プログラムの実施を通して、人・組織・コミュニティ間の多様なつながりやネットワークを実現し、孤立・孤独を生まない社会の創出を目指します。

### 2. 募集期間

2021年5月20日（木）～7月20日（火）正午

### 3. 研究開発期間・規模

#### (1) スモールスタート（可能性検証）<sup>注1)</sup>

研究開発期間：原則1年半

研究開発費：1,200万円/年（直接経費）程度上限

ステージゲート評価<sup>注2)</sup>にて、研究開発の継続が妥当と判断された場合、以下の本格研究開発に移行する。

#### (2) 本格研究開発

研究開発期間：原則3年間

研究開発費：スモールスタート期間の予算規模と同程度～2倍程度の想定

#### 注1) スモールスタート（可能性検証）

プロジェクトの採択時には比較的小規模で開始し、本格研究開発に向けてプロジェクトの体制を整備し、PoC（Proof of Concept：概念実証）実施を含めプロジェクトの目標達成への道筋を検証する仕組み

#### 注2) ステージゲート評価

研究開発をスモールスタートと本格研究開発のステージに分け、スモールスタート期間の評価に基づいて、研究開発の継続の妥当性を判断し、本格研究開発への移行または中止を決定する仕組み

### 4. 研究開発対象

本プログラムは、さまざまな社会構造の変化を踏まえ、人文・社会科学の知見も活用し、社会のメカニズム理解にまで掘り下げた研究開発が必要なものを対象とし、研究知と現場知を融合させ、施策現場でのPoCまで実施することを想定しています。

具体的には以下①②③の研究開発要素を含めた一体的な研究開発を推進します。概念的な研究にとどまることがないよう、特に研究開発要素③においては、社会的孤立・孤独を予防する仕組みを実証するための施策現場（国内の特定地域や、学校、職場、コミュニテ

ィーなど)を具体化した提案を求めます。

- ①社会的孤立・孤独メカニズム理解と、社会的孤立・孤独を生まない新たな社会像の描出
  - ・人や集団の行動、心理、社会的背景の検証から、どのようなメカニズムによって社会的孤立・孤独が生じるのか、社会的孤立・孤独の状況にある者の視点も考慮した社会の在り方を分析します。その結果をもとに、予防すべき社会的孤立・孤独を明確にするとともに、社会的孤立・孤独を生まない新たな社会像を描出します。
- ②社会的孤立・孤独リスクの可視化と評価手法（指標など）の開発
  - ・①で描いた社会像の実現に向け、まず人や集団が社会的孤立・孤独に陥るリスクを早期にとらえるための可視化や評価手法（指標など）を研究開発します。
- ③社会的孤立・孤独を予防する社会的仕組み
  - ・社会的孤立・孤独を予防する社会的仕組み（予防施策）を開発し、②で開発した社会的孤立・孤独リスクの可視化・評価手法（指標など）に基づいた評価・実証を、国内の特定地域や、学校、職場、コミュニティなどを対象に行います。

<新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行を受けた2021年度の公募について>

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の世界的な流行により、対面による直接的なコミュニケーションが困難となり、想定外の物理的な分断への対応が迅速かつ十分でないあらゆる場面で、社会的孤立・孤独の顕在化・深刻化が起こり、また、これまで社会的孤立・孤独から無縁だった人や集団も社会的孤立・孤独に陥るリスクが高まっています。今後、ウィズコロナ・ポストコロナの社会における望ましいつながりやネットワークの在り方を追求し、これを積極的に構築していく必要があります。従って、2021年度は、全ての提案について、新型コロナウイルス感染症の社会的影響を踏まえたものを募集します。

戦略的創造研究推進事業（社会技術研究開発）の実施状況（2021年度）

領域・プログラム名称	総括	研究開発プロジェクト採択数										
		2011 (H23)	2012 (H24)	2013 (H25)	2014 (H26)	2015 (H27)	2016 (H28)	2017 (H29)	2018 (H30)	2019 (R01)	2020 (R02)	2021 (R03)
SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム (社会的孤立・孤独の予防と多様な社会的ネットワークの構築)	浦 光博 追手門学院大学 教授											7
科学技術の倫理的・法制度的・社会的課題 (ELSI)への包括的実践研究開発プログラム	唐沢 かおり 東京大学 大学院人文社会系研究科 教授										6	5
SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム (シナリオ創出フェーズ・ソリューション創出フェーズ)	関 正雄 明治大学 経営学部 特任教授／損害保険 ジャパン株式会社 サステナビリティ 推進部 シニアアドバイザー									10	12	8
「人と情報のエコシステム」研究開発領域	國領 二郎 慶應義塾大学 総合政策学部 教授						5	6	7	6	-	-
「安全な暮らしをつくる 新しい公／私空間の構築」研究開発領域	山田 肇 東洋大学 名誉教授 ／NPO法人情報通信政策フォーラム 理事長					5	3	5	-	-	-	-
科学技術イノベーション政策のための科学 研究開発プログラム	山縣 然太郎 山梨大学 大学院総合研究部 医学域社会医学講座 教授	6	5	5	5	-	3	4	4	5	5	7

(件数は研究開発プロジェクトの採択件数。プロジェクト企画調査を除く)